

41385

教科書文庫

4
8/0
31-1942
0000 30/868

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

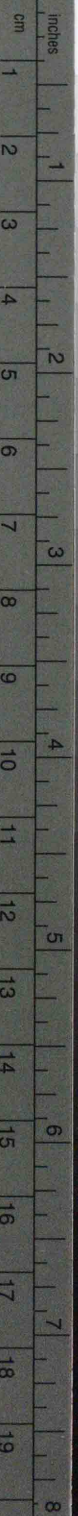


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



初等科國語

五

文部省



資料室

395.9  
M014

初等科國語

五

文部省

目 録

一	大八洲……………	四
二	弟橘媛……………	七
三	木曾の御料林……………	九
四	戦地の父から……………	十八
五	スレンパンの少女……………	二十六
六	晴れたる山……………	三十五
七	ことばと文字……………	三十八
八	海の幸……………	四十五
九	軍艦生活の朝……………	五十二
十	武士のおもかげ……………	五十七



十一	かんこ鳥……………	七十
十二	炭焼小屋……………	七十二
十三	ぼくの子馬……………	七十八
十四	星の話……………	八十七
十五	遠泳……………	九十四
十六	海底を行く……………	百二
十七	秋のおとづれ……………	百四
十八	飛行機の整備……………	百八
十九	動員……………	百二十一
二十	三日月の影……………	百二十二

附 録

一	「あじあ」に乗りて	二	大地を開く
三	草原のオボ		



一 大八洲おほやしま

この國を 神生みたまひ、  
この國を 神しろしめし、  
この國を 神まもりませす。

島々 かず多ければ、  
大いなる 島八つあれば、  
國の名は 大八洲國。

嚴として 東海にあり。

日の出づる 國にしあれば、  
日の本と ほめたたへたり。

島なれば 山うるはしく、  
島なれば 海めぐらせり、  
山の幸 海幸多く。

海原に 敷島の國、  
青山に こもる大和やまと。

春秋のながめつきせず。

大神おほみかみ 授けたまひし、

稲の穂のそよぐかぎりは

あし原の中つ國なり。

黒潮のたぎるただなか、

大船の通ひもしげく、

浦安うらやすの國ぞこの國。

浦安の安らかにして、  
天地あめつちと きはみはあらず、  
細戈くはしほこ 千足ちたるの國は。

二 弟橘媛おとたちばなひめ



日本武尊やまとたけのみこと相模さがみの國より  
御船みぶねにて上總かづさきへ渡り  
たまふ。  
にはかに風起り波た  
ちさわぎて、御船進まず。

從者みな船底におそれ伏したり。

尊に従ひたまへる后、弟橘媛「これ海神のたたりなるべし。かくては御命も危からん」と思ひたまひて、尊に申したまふやう、

「われ皇子に代りて海に入り、海神の心をなだめん。皇子は勅命を果して、めでたくかへりごと申させたまへ。」

と申したまひて、すがだたみ八重皮だたみ八重きぬだたみ八重を波の上に敷きて、その上におりたまへり。

はたして荒波おのづから静まりて、御船は進むことを得たり。

七日ののち、後の御櫛ただよひて海べに寄りぬ。尊、これををさめて、後のみはかを作らせたまふ。

東國の賊を平げて、尊西へ歸りたまふ時、相模の足柄山を越えたまふ。はるかに海を望みたまひて、

「あづまはや。」

とのたまひぬ。これよりのち、このわたりを廣く「あづまといふとぞ。」

三 木曾の御料林

神宮備林

皇大神宮は、二十年ごとにあらたに御殿舎を御造營になり、そのたびに正遷宮しやうせんぐうの御儀が行はれる。

この御儀は、天武天皇の御時に定められ、第一回の大典は、持統天皇ちとうの御代に行はれた。昭和二十四年は、第五十九回の正遷宮に當るが、實に一千二百有餘年の歴史を重ねてゐる。

あらたに御殿舎を御造營になる用材は、もと伊勢いせの神路山たかくら・高倉山たかくらなどから伐り出されてゐたが、織田信長おだのぶながが、木曾の森林から伐採して奉つたことがあり、その後百年餘りたつて、それが例になるやうになつた。明治の大御代から昭和

の今日まで、御遷宮に際しては、かならず木曾から御用材を奉ることになつてゐる。

神宮の御殿舎は、すべて檜ひのきの白木造りであるから、御造營に要する檜の數は、一萬二千本に近く、しかもすべてえりすぐつた良質のものである。かうした檜は、一朝一夕に得られるものでなく、したがつて、つねに大木を保護するとともに、植林によつて、あとからあとから育てて行くやうにしなければならぬ。

明治三十七年、明治天皇は、特にこのことに大御心をかけさせられ、そのおぼしめしによつて、木曾の御料林中に、神宮

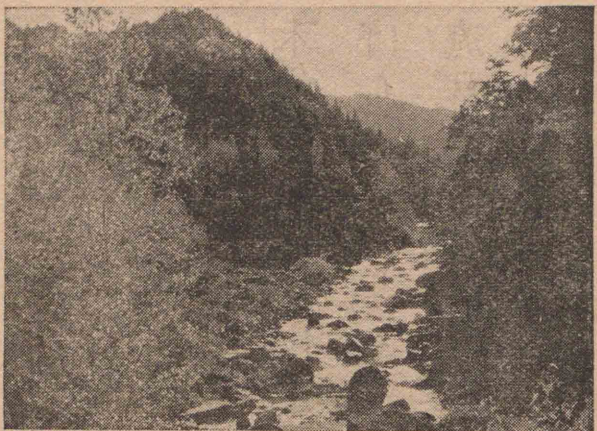
備林が定められることになつた。以来、神宮御造營の用材は、永久につきる心配がなくなつたのである。

この神宮備林は、木曾川の上流が、白い御影石の川床をカんで流れる木曾谷の左右の山々にある。

今、中央線の上松驛あけまつで汽車をおり、森林鐵道に乗りかへて、木曾川の支流にそひながらさかのぼつて行くとする。しばらくは、切りそいだやうなかけの下の青い淵ぶちや、勢こんで流れる水の清さに、目をうばはれるのであるが、やがて、左右を取り巻く山の木々に、われわれは目を移すやうになる。窓の外のけしきは變つても、山から山へ續く生ひ茂つたみ

どりの森林は、つきることがない。何といふ森林のつらなりであらうとおどろくころは、まだ御料林のほんの入口へはいつたばかりなのである。

このやうにして、山を分けながら谷間をのぼつて行くと、やがて標高千五百メートルの中立神宮備林なかだちに着く。ここは、昭和十六年六月三日、神宮御造營用材中いちばんたいじな、内宮ないくう外宮ぐわいくうの御神木を伐り出したみそまはじめ祭の行はれたところである。





みそまはじめ祭

青々と大空をおほふ檜の大木が、美しい柱のやうに立つてゐる中立神宮備林の朝である。やまがらこまどりうぐひすなどの鳴き聲が、谷川の音にまじつて聞えて来る中を、今日のみそまはじめ祭の盛儀を拜観する人々の列が、林の間の細道傳ひに次から次へ續いて行く。

しめなはまん幕を張りめぐらした祭場は、檜のあら木造りで、内宮外宮の御神木の前に南面して作られてゐる。

木の間からもれる初夏の光に、まばゆくかがやく祭場の東から南へかけた林の傾斜面は、拜観者や、青年學校・國民學

校の生徒などで、うつめつくされてゐる。深山の靈氣に打たれて、だれ一人静けさを破る者はない。きちんと姿勢を正して、祭典の始るのを待つてゐる。

午前十時、最初の太鼓が、あたりの静けさを破つて鳴らされる。それを合圖に、身も心も清めに清めて、ひたすら今日を待つてゐた奉仕員たちは、目にしみるばかりの眞白な齋服を着て、定め場所へ集つて來た。

やがて第二の太鼓が山全體に響き渡つて、儀式に使はれるいろいろな祭具が運ばれる。最後の太鼓が打ち鳴らされると、奉仕の人々は、はらひ所に並んでおはらひを受け、祭

具やお供へものをささげて、静かに祭場へ進んで行く。

祭場には、中央と四すみに、五色の幣へいがかうがうしく立てられてある。大麻を振つて祭場が清められ、おごそかに祝のり詞ことばが讀まれる。

いよいよ御神木伐り始めの御儀に移つた。

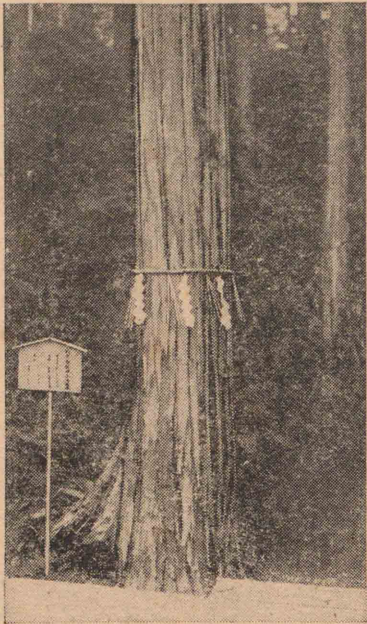
奉仕員は、のを取つて御神木の前方南寄りに進み、大麻でおはらひをする時のやうに、左右左と三たび御神木の根もとへ向かつてのを打ち込む。をの入れを終つて、奉仕の人々は、一拜して静かに祭場を退出した。

内宮外宮の御神體を奉安する御神木伐り始めの御儀は、

かくて終つたのである。

しめなはでかざられた、樹齡じゆれい二百數十年に及ぶ二もとの

御神木を仰げば、天を指してすくすくと生ひ立つ幹は長く、はるかに冠かんむりのやうな梢をいただいてあるのが見られる。十萬



五千町歩にわたる木曾の御料林中、最良の檜である。

午後になつて、この御神木は、さらに白衣を着た十四名のえり抜きえり抜きのそま夫たちによつて、伐られて行つた。

伐り方は古式にしたがつて、御神木の根もとへとぎすま

したをのをはつしと打ち込むのである。しはぶきの聲一つしない、神代さながらの山中はしばらくの間、打ち入れるをの響きのこだまで満たされる。一打ちごとに、三つの切口から清らかな木のはだが現れる。

伐り倒された御神木は、用材の長さに切られ、六十名の運材夫によつて木馬に乗せられ、木馬道を静かに運ばれて行く。運材夫が聲高く歌ふ木やり歌は、中立神宮備林の森厳な空気を明かるくふるはせて、いつまでも響き渡つた。

## 四 戦地の父から

今日鏡をのぞいて、「おや。」と思はず顔をなでまはした。

「これでは、義男たちが見ても、おとうさんとは氣がつくまい。」

と思はれるほど日にやけた眞黒な顔に、ぼうぼうとひげが延びてゐる。

戦鬪が一段落ついたので、今日は久しぶりの休養だ。おとうさんたちは、鏡に向かつて子どもものやうにはしやぎながら、ひげそりにむちゆうになつてゐる。しやりしやりと、かみそりの音が氣持よく響くたびに、ひげの中からおとうさんの顔が現れて来る。もうこれで南洋の住民と見まぢ

がへられる心配はなくなつた。

敵前上陸をして敵陣へ突撃する時にも、熱帯の大きな木やかづらがからみついてある密林を、へとへとになつて進んで行く時にも、おまへたちの顔が、ふと目の前に現れて、

「おとうさん、しつかり。」

とはげましてくれた。そのたびに、からだ中に力がわき起つて、日本の軍人として、恥づかしくない御奉公をすることができた。

朝夕、武運長久を祈つてくれるおまへたちの真心が、數千キロの海山を越えて、おとうさんの心に通つてゐるのだ。

おとうさんは、いつもおまへたちといつしよに、戦争をしてゐるのだと思つてゐる。

ひげをそつたあとのさつぱりした氣持で、持物をせいとんしてゐると、背囊は、なうからおまへの手紙が出て來た。たびたび激しい戦をしたのに、よくもなくならなかつたものだと、思ひながら、もう一度讀み返してみる。すると、

「だれからの手紙だ。ちよつと見せてくれ。」

と、そばにあた戦友が、おまへの手紙をひつたくるやうにして讀み始めた。

「義男くんは、何年生かい。」

「國民學校の五年生だ。」

「五年生。ぼくは中學生かと思つた。えらい子だ。」

と、心から感心して、おとうさんをうらやましさうに見てゐた。

おとうさんの留守中、おかあさんを助けて、家の仕事に精を出したり、くに子や、ひき子の世話をよくしてくれたりすることをおかあさんからの手紙で知つて、おとうさんはうれしくてたまらない。

この手紙を書いて、あると、あたりが急に暗くなつた。大雨だ。スコールといつて、こんな大雨が毎日きまつたやう

に降る。はだかの兵隊さんたちが外へとび出して、うれしさうに雨水を浴びてゐる。

スコールの通り過ぎたあとには、熱帯の盛んな植物のみどりといふみどりがすつかり洗はれて、よみがへつたやうになる。

おとうさんたちは、赤むらさき色のマンゴスチンを、眞二つに割つてたべる。白い實を舌の上にのせると、すつとつけて、上品なあまさが口に残る。おまへにもぜひ一つと思ふのだが、こればかりは送りやうがないのが残念だ。

皇御國すめらみくにのもののふは

と、一人の戦友が突然歌ひだすと、ほかの戦友たちも聲をそろへて、

いかなることをか務むべき。

ただ身にもてる眞心を、

君と親とにつくすまで。

と歌ふ。おとうさんは、静かに目をつむつて、歌聲に耳を傾ける。今まで、おとうさんたちが勝ちぬいて來た激戦の數の場面が、走馬燈のやうに次から次へ思ひ出される。さうして、この歌の一句一句が、腹の底にしみ入るやうに思はれる。

あすからは、また新しい戦闘の準備にかかるのだ。おとうさんを始め、部隊の者はみんな元氣だ。戦陣衛生も行きどどいてゐるから、おまへたちの心配するやうな病氣には、だれ一人かかつてゐない。

住民たちも、心から日本軍になつて、大東亞の建設に協力してくれてゐる。日本語が習ひたいといつて、おとうさんたちのところへ、毎日何人ともなくやつて來る。

おまへたちは、おとうさんたちのあとつぎなのだ——といふことを、しみじみと感じる。おまへたちが大きくなるのを、廣い南洋の天地と、たくさんの住民たちが、手をひろげ

て待つてゐる。家のお手傳ひをしながら、一生けんめいに勉強することだ。

五 スレンバンの少女

一

マライの英軍を急追し、所在に撃破しながら南下する皇軍が、スレンバンの町にはいつた時のことです。

「皇軍来たる。」の報を聞くと、附近の密林やゴム園の中にかくれてゐた住民たちも、安心して町へ歸つて來ました。マライ人、支那人、インド人たちは、勇ましい日本の兵隊さんを

喜んで迎へました。



その中にたつた一人、色  
のあまり黒くない、十歳ぐ  
らゐのかはいい少女が日  
の丸の旗を振りながら、  
「萬歳。萬歳。」  
といつてゐるのが、兵隊さ  
んたちの目を引きました。

「あ、日本人がある。」  
「日本の女の子だ。」

兵隊さんたちはさう思ふと、これもうれしさうに、にこにこしながら、

「萬歳。 萬歳。」

といひました。

「日本人は、あなた一人か。」

と、聞く兵隊さんもありました。

二

少女はこの町の雑貨商の娘で、父はインド人でしたが、母は日本人でした。土地の學校へ通つてゐるかたはら、母親から日本語を教へられ、日本には天皇陛下がいらつしやる

こと、日本人は陛下の赤子であること、日本には富士山といふりつばなお山があることなどを、いつも聞かされてゐました。さうして、毎朝母といつしよに、お寫眞を拜むことにしてゐました。

「日本の子どもは、みんなお行儀がいいのです。富士山のやうにりつばです。あなたもお行儀をよくしないと、日本の子どもに笑はれますよ。」

と、母はよくかういひました。

三

大東亞戦争が始ると、母は日本人であるといふので、敵の



官憲からに生まれある日、突然インド人の巡査が来て、母に同行を求めました。娘のあるのを見て、巡査は、

「この子もいつしよだ。」

といひます。母は、きつぱりと、

「この子は、日本人ではありません。」

といひました。

「あなたの子なら、日本人ではないか。」

「いいえ、違ひます。私の子ではありません。この子は、父

も母もインド人です。私は、この子の繼母です。」

インド人の子と聞くと、インド人の巡査は、やうすを變へま

した。さうして母親に、

「さあ、行かう。」

とせきたてました。

「ちよつと待つて下さい。」

母は、さういひながら、巡査を拜むやうにして、娘を一間へ呼びました。

母は、子をだきしめました。

「おかあさん。」

母は、子にほほずりをしました。この子を今手ばなして、またいつあへるでせう。

「おかあさんは、あの人といつしよに行かなければなりません。病氣をしないで、元氣で待つてみなさい。たとへ、十年たつても二十年たつても、わたしはきつと歸つて來ますから——それから、日本の兵隊さんは、かならず勝つてくれます。兵隊さんたちがこの町へ來たら、戸だなの中にあるお米や、かんづめや、ビールや、みんな出してあげてください。いま一つ——日の丸の旗が作つてあるから、あれを振つて、萬歳萬歳といつて迎へるのですよ。」

ここまでいふと、母はこみあげて來る悲しさにことばも止つて、机の上へつつぶしました。

「おかあさん。」

子はもう一度母を呼びました。母は涙をふいて立ちあがり、娘の手を取つてお寫眞の前に立ちました。

二人は、萬感をこめて最敬禮をしました。母は、戸だなから二本の日の丸を取り出し、一本を娘に與へて、ふたたびお寫眞の前に立ちました。

親と子と「萬歳」の一こと。子はそのまま泣き倒れてしまいました。しばらくして顔をあげると、巡査のあとについて出て行く母の後姿がちらと見えたり、あとは涙にぼつとして、何が何やらわかりませんでした。

四

大東亞戦争は、一面にことばの戦です。一たび占領地へはいれば、ことばが通じないかぎり、手も足も出ません。

たつた十一歳、内地なら国民学校四年生のこの少女は、その後、皇軍のある隊の通譯を命じられました。

その隊は、この地方の鐵道の復舊工事に當りました。隊長以下何百の將兵と、マライ人・インド人の鐵道従業員たちの先頭に立つて、少女は、たくみに日本語・英語・マライ語・インド語を使ひわけながら、すのやうに活動しました。

隊長は、自分の子のやうにかはいがりました。兵隊さん

たちともみんな、仲よしになりました。

「おかあさんに別れて、さびしいかね。」

と、兵隊さんが肩をたたくと、

「天皇陛下がいらつしやるから、さびしくありません。兵隊さんといつしよに仕事をすることは、お國のために孝行です。」

といひます。「お國のために忠義です。」と教へても、「いや、孝行です。」といつて、なかなか聞かないさうです。

六 晴れたる山

すがやかに晴れたる山をあふぎつつわれ御軍の一人となりぬ

父母の國よさらばと手を振ればまなぶた熱しますら男の子も

あふぎ見るマストの上をゆるやかに流るる雲は白く光れり

江南のしらじら明けを攻め進むすめら御軍うしほのご

とし

蘇州<sup>そしう</sup>までさへぎる山も岡もなしはるばるとかすみ水牛あゆむ

わらべらはちひさき笑顔ならべつつ兵に唱歌ををそはりてある

白々とあんずの花の咲き出でて今年も春の日ざしとなりぬ

七 ことばと文字

私たちがうれしいなど感じたり、えらいなど感心したり、何かすばらしいことを思いついた時などには、そのことをおとうさんや、おかあさんや、先生や、お友だちに早く知らせたいと思ひます。

そんな時、

「おとうさん、ぼく、みんなで海へ行つて、ほんたうに愉快でした。」

「おかあさん、あの人は、えらいことをしたものです。」

「先生、この間から、いろいろ考へてゐたのですが、どうどうこんなものを作りました。」

「本田くん、おとうさんといつしよに山のぼりをして、ほんたうにおもしろかつたよ。」

といつて、自分の氣持を傳へます。

このやうに、話しかける相手が目の前にある時は、ことばを口に出して、思つてゐることを傳へますが、離れてゐて直接話ができないやうな時には、手紙や文に書いて知らせます。かうして話しかけると、話しかけられた人たちも喜んで返事をしたり、いろいろなことを話したりしてくれま

それは皆おたがひに話したり、書いたりすることばや、文字がよくわかるからです。もし、私たちの話すことばや、書く文字が、まつたくわからない外国人であつたら、いくら話してみても、どんなりつばな手紙を書いてみても、決して心持が通じ合ふやうなことはありません。日本人である私たちは、いつもこのやうに、わが國のことばと文字のおかげをかうむつてゐるのです。

自分の思つてゐることを、話したり書いたりして、すつかり相手にわかつてもらつた時ほど、うれしいことはありません。また、いろいろなお話を靜かに聞き、書かれたものを取り返し讀んで、ことばがや心持がよくわかつた時は、同じやうに喜ばしいものです。このやうに、ことばと文字は、私たちの心を楽しくしてくれます。

私たちが、心の中で考へたり感じたりしてゐることを、ことばで話してみると、その考へや感じが、心の中で思つてゐた時よりも、はつきりして來ます。更に、ことばで話したことを文字で書き表しますと、今まで氣づかなかつた考への不足や、感じ方の淺さが、はつきりわかつて、自分の考へや感じを、いつそよくはしくし、深くして行くことができます。よく、

「わかつてあるから、話さなくてもいいよ。」

といふ人がありますが、そんな人は、まだまだことばや文字のありがたさを知らない人です。わかつてあると思つたことでも、話したり書いたりして、始めてほんたうにはつきりするのです。

ことばと文字は、いはば心の中を寫し出す鏡であります。ただ、ことばは、思つたことを聲でいひ表すのですから、それは聞いてある人の心にだけ残ります。それに引きかへ、文字に書き表したものは、どこへでも傳はり、いつまでも残りますから、それを讀むすべての人たちに、場所が違つてゐて

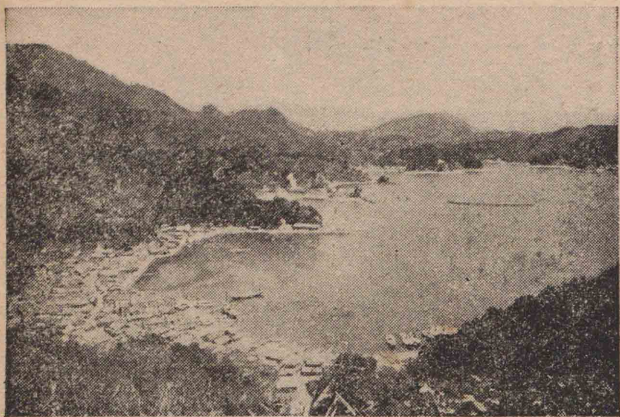
も、時代がへだたつてゐても、ちやんと心持を傳へることができます。

文字で書き表す場合には、書いたものを何べんも讀み返して、消したり書き足したりして、自分の考へを、できるだけわかりやすく書き表すことができます。しかし、ことばで話す時には、一々ことばを深く考へたり、いひまはしを工夫したりするひまがありません。それで、とかくことばがおろそかになりがちです。それでは困りますから、いつも話すことばに注意して、文字で書くのと同じやうな心がけを持つことが大切であります。

いくら美しい文字で文を書いても、うそいつはりの心持を書いたのでは、だれも感心して讀まないやうに、どんなにかざつたことばで話しても、真心がこもらなければ、少しも聞く人々を感心させません。これと反對に、りつばな心持が正しいことばで書かれてあれば、その文を讀む人々が、心から感動するやうに、真心を正しいことばで話せば、聞く人たちは、喜んでいつまでもその話に耳を傾けます。

私たちは、文字を正しくきれいに書き、りつばなことばで話すことを忘れてはなりません。さうすることが、昔から傳はつてあるだいな私たちの國語を、ますますりつばなみがいて行くことになるのです。

### 八 海の幸



沖の方は、白くもやでかすんで、見通しがきかない。日の出前の海は、油でも流したやうに静かである。ばさつばさつと、波が足もとで軽く音をたててゐる。

あたりはまだほの暗く、明けきらない港の朝の風は、頬ほほをこちよくなでて通



る。

「ポー」と力強い汽笛が、突然この静かな港の空気をゆり動かす。その音が、港を両手でだきかかへるやうに取り圍んである裏の山々にこだましながら、長く尾を引いて消えて行く。

左手の山の頂が、銀のやうに白く光り始めると、どす黒かつた海面が、にぶい光線を反射する。

折から「パンパン」と、白い煙の輪を吐きながら、乳色のもやを破つて、漁船が真直に近寄つて来る。これを合圖に、今まで眠つてゐた港の船が、急に目をさまし始める。

海面から立ちのぼつてゐた白いもやが、薄れて行つて、山の頂に横たはる雲が、黄にくれなぬにかがやき渡ると、はるかな海の上をおほうてゐたもやも消えてなくなり、太平洋のかなたから押し寄せて来るみどりの波が、きらきらと光りだす。

帆柱に旗を立てた漁船が、港へはいつて来たのをきつかけに、二隻・三隻と續いて港へはいつて来る。母親に子どもがすがりつくやうに、今はいつて来たばかりの漁船をめぐけて、ぎいぎいと櫓この音もすがすがしく、たくさんの小舟が近づいて行く。漁船のかたはらに、小舟がびつたり寄りそ

ふと、

「えんさらほい、えんさらほい。」

と掛聲にぎやかに、日にやけた漁夫たちが、遠くの海から取つて来た数々の海の幸を、漁船から小さな舟に移す。小型の潜水艦を思はせるやうな、まるまると肥えたまぐろ、細長い魚雷のやうなかじきまぐろ、大きなさめ——その白い腹が朝の太陽に光り、ひれが力強くぴんと左右に張つてゐる。このまぐろや、さめをのせた小舟は、大急ぎで岸の魚市場をめざしてこぎ歸つて行く。

魚市場の廣いたたきの上を、鉢巻をした若者が、大きな魚をてんびん棒につるしたり、手押車にのせたりして、威勢よく右へ左へ運んで行く。見る見るまぐるもさめも、次から次へ行儀よく並べられる。

大きな魚にまじつて、小型の爆弾のやうなかつをが置かれ、ついつきまでぴちぴちとはねてゐたやうな、六七十センチもある鯛が、つやつやした櫻色のはだに、むらさきの星をきらめかしてゐる。その間にまじつて、帯のやうなたち魚が、いくつもいくつも横たはつてゐるのは、めづらしい見ものである。

四角な箱の中には、近くの海で取れたあぢやさばが、青光

のする新鮮な色を見せ、まるいをけの中には、いかが折り重  
なつて、今にもちゆつと塩水を吹き出しさうである。この  
魚の行列の間を、市場の人たちと魚問屋の若者たちが、いそ  
がしさうに右往左往してゐる。

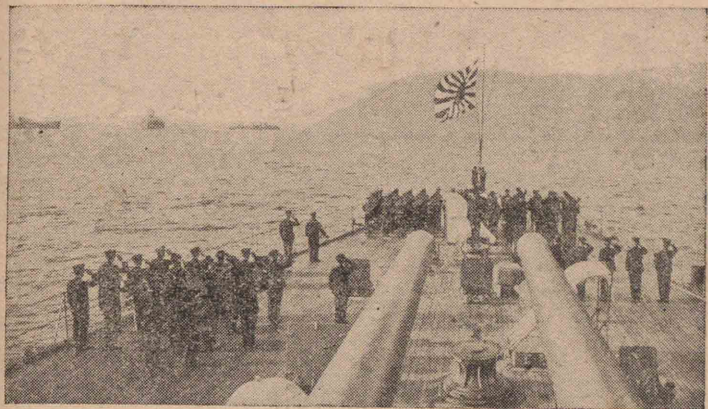
荷作り場では、まぐろやさめの腹をさいて、氷を入れて送  
り出す者や、木箱にぎつしり氷といつしよにつめて、荷作り  
する者や、まるで戦場のやうないそがしさである。新鮮を  
たつとぶ魚の取引きをする魚市場の朝は、見るからにきび  
きびとして、威勢がよい。「ブツブ」とけたたましい警笛の  
音をあとに残して、荷作りされた魚の箱を山のやうに積ん

だ貨物自動車が出て行くのは、それから數分のの  
ちである。

太陽があかあかと四方の山々を照らし、波が静かなうね  
りに變つて沖から押し寄せるころになると、あれほど活氣  
に満ちて生きもののやうに活動してゐた魚市場も、ひつそ  
りと静まり返つて、またあすの朝を待つのである。

ちやうどそのころ、港のあちらこちらにもやひしてゐる  
漁船からは、朝げの煙が波の上に影を落しながら、ゆつくり  
と立ちのぼる。

九 軍艦生活の朝



東の空が明かるくなると、今まで軍港のやみに包まれてゐた軍艦の壮大な姿が、だんだん現れて来る。後甲板ミカクハには、當直將校の姿が見え、艦橋には、望遠鏡を持つた掌信號兵が遠くを見張つてゐる。舷門には、銃を手にした番兵があたりを警戒してゐる。千何百人の乗員は、なほ安らかな眠りを續けてゐるのであらう。

艦内は深山みやまのやうな静かさである。

人の顔がやつと見分けられるやうになつたころ、時鐘番兵がことごと後甲板に来て、「總員起し五分前」と、當直將校に報告する。軍艦の起床時刻は、夏は五時、冬は六時である。間もなく、甲板士官や傳令員が起きて来る。副長はもう上甲板に出て、今日の天気はどうかと空を眺めてゐる。

やがて午前五時の鐘が鳴ると、當直將校が元氣のよい聲で號令を掛ける。

「總員起し。」

この號令で、朝の静かさがたちまち破られ、起床ラツパは勇

ましく響き、傳令員は號笛を吹きながら、總員起し。と呼んでつり床の間をぬつて行く。すると、乗員は一度にとび起きて、手早くつり床をくくる。これから號令が次々にくだる。それにつれて、つり床は正しく一定の場所に納められる。すべての窓や出入口は開かれる。これらの仕事は、家で毎朝起きると、まづ夜具をかたづけ、雨戸をくると變りはないが、千何百人の乗員が號令に従つて規律正しく活動するさまはいかにも目ざましい。何分かのうちに、もう艦内はすつかりせいとんする。

そこで五分間の休みがあつて、露天甲板洗ひとなる。こ

れは水兵員の受持である。

「兩舷直、整列。」

のラツパが一きは高く響き渡ると、はだしのままの水兵員が、後甲板にはせ集つてずらりと整列する。まもなく、當直將校から威勢のよい號令がかかる。

「露天甲板洗へ。」

水兵は、くもの子を散らすやうに八方へ散つて、かひがひしくズボンをまくりあげ、身輕な姿になつて、分隊ごとに甲板洗ひを始める。下士官が、甲板の吐水口からふき出る海水を、をけに汲んで、どンドン流すと、洗ひばけを持つた何十

人の水兵が甲板をこすりながら頭を並べて進んで行く。

甲板洗ひがすむと、

「顔洗へ。」「たばこぼん出せ。」

の號令がくだる。そこで始めて乗員は顔を洗ふ。そのうち上陸員が歸艦する。あちらこちらで「おはやう。」がいかはされる。火なほ一本のたばこぼんのまはりには、人の山ができて、いろいろの話が出る。笑ひ聲も起る。まもなく、食事のラツパが響く。一時間餘りも活動したあとであるから、食事のうまいこと。

午前八時になると、艦尾の旗竿に軍艦旗があげられる。

「君が代」のラツパが奏され、衛兵隊はさきげ銃の敬禮を行ひ、艦長を始め乗員一同は、皆姿勢を正して軍艦旗に敬禮する。朝日にかがやく軍艦旗が、海風にひらめきながらしづしづとのぼつて行くさまは、まことにおごそかである。

軍艦旗を仰いで、心の底まで清められた乗員は、これから訓練に取りかかるのである。

### 十 武士のおもかけ

雁のみだれ

八幡太郎義家、關白賴通の館にて軍の物語しける時、大江

の匡房まさふさ聞きて、

「器量ある武將なれども、なほ軍の道を知りたまはず。」

とひとりごとのやうにいふ。義家の家來、これを聞きつけて、げしかることをいふ人かな。と心のうちに思へり。

やがて匡房、關白の館を出て、義家も出でぬ。家來、あるじを見て、

「かの人、かくかくとのたまへり。」

といへば、義家、定めてしさいあるべしと思ひ、匡房が車に乗らんとするところに進み寄りて、急しやくす。それよりのち、義家は匡房を師として學びけり。

義家、金澤かなざはの城を攻めんとする折、たまたま一行の雁、刈田におりんとして、にはかに列をみだしつつ飛び行きぬ。義家あやしみて、

「かつて師の教へたまふことあり。野に伏兵ある時、雁列をみだる。この野にかならず伏兵あらん。」

とて、手をわかつて三方より圍む。はたして、敵、三百餘騎をかくしおきたるを、義家の軍さんざんに討ちて、つひに敵軍を攻め破りぬ。

かりまたの矢

義家、ある日安倍の宗任むねたふらをつれて、廣き野を過ぎ行きし

に、きつね一匹走り出でたり。義家、背に負ひたるうつぼよ  
 り、かりまたの矢を抜きて弓につ  
 がへ、きつねを追ひかけしが、殺さ  
 んもふびんと思ひて、左右の耳の間をねらひてひようと射  
 る。矢は、あやまたず頭上をすれすれにかすめて、きつねの  
 前なる土に立ち、きつねは、その矢につき當りて倒れたり。



宗任、馬よりおりてきつねを引きあげながら、

「矢は當らぬに、死にて候。」

と申せば、義家、

「おどろきて死にたるなり。捨ておかば、ほどなく生き返

るべし。」

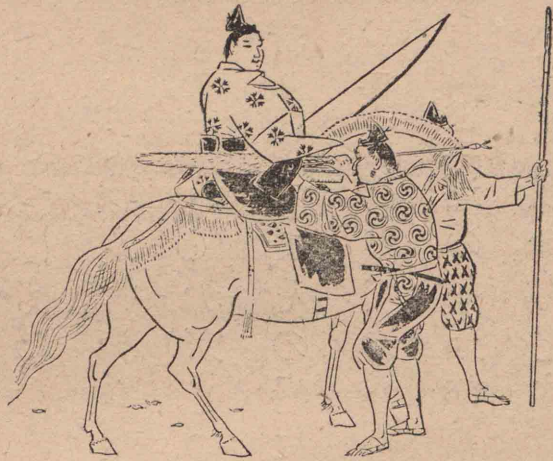
といふ。

宗任、すなはち矢を取りてさし出せ  
 ば、義家、背を向けてうつぼにささせけ  
 り。宗任はもと賊軍の頭にて、近ごろ  
 降りし者なれば、他の家來どもこのさ  
 まを見て、

「危きことかな。するどき矢をささ

しめたまふことよ。もし、宗任に悪しき心もあらば。」

とて、手に汗をにぎりけり。





目を射抜かれて

相模さがみの國の住人、鎌倉かまくらの權五郎ごんごろう景正かげまさといふもの、先祖より名高きつはものなり。十六歳にて敵の大軍に向かひ、命を捨てて戦ふ折から、敵の矢にて右の目を射られぬ。矢は、首を貫ぬきてかぶとに射つけたれば、たやすく抜けず。矢を折り捨てて、その場に敵を射倒しけり。

景正、歸りてのち「手を負ひぬ」といひて、のけざまに伏したれば、三浦みづらの平太郎たへつら爲次ためつぎといふつはもの、景正が顔をふまへて矢を抜かんとす。

景正、すなはち刀を抜き、爲次がよろひの草ずりをあげて下より突かんとしければ、爲次おどろきて、

「などて、かくはするぞ。」

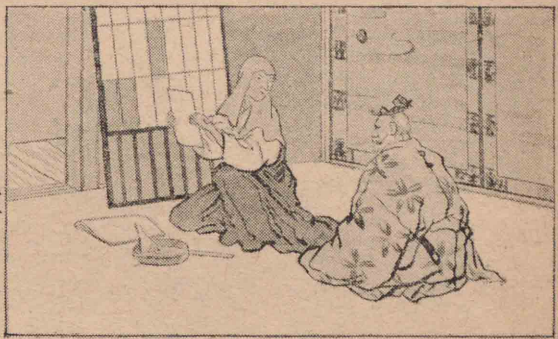
と問ふ。景正、

「弓矢に當りて死するは、つはものの望むところなり。いかでか、生きながら足にて顔をふまゐることあらん。汝を殺して、われも死すべきなり。」

といふ。

爲次、ことばなく、ひぎをかがめ顔を押しさへて、矢を抜き取りけり。

障子張り



相模守時頼さかみのかみときよりの母を、松下禪尼ぜんにといへり。

時頼を招くことありけるに、すすけたる障子の破れを、禪尼てづから小刀にて切りまはしつつ張りあたり。城介義景じやうのすけよしかげこれを見て、

「その障子をこなたへたまはりて、なにがしに張らせ候はん。さやうのことに、なれたるものにて候。」

候。

と申しければ、禪尼

「その男、尼あまが細工にはよまさり候はじ。」

とて、なほ一間づつ張りあたり。義景

「すべてを張りかへんは、はるかにたやすく候。まだらになりて見苦しかるべし。」

と重ねていへば、

「尼ものちには新しく張りかへんとは思へど、すべて物は破れたるところをつくるへば、しばらくは用をなすものぞと、若き人に見ならはせんとして、かくするなり。」

といひけり。

馬ぞろへ

山内一豊やまうちかつとよ織田家おだに仕へし初め、東國第一の名馬なりとて、

安土あづちに引き来て商なふものあり。信長の家臣らこれを見るに、まことにならびなき馬なり。されど價あまりに高くして、買ふもの一人もなく、空しく引き歸らんとす。

一豊もこの馬ほしく思へど、求むることいかにもかなふべからず。家に歸りて、

「世の中に、身貧しきほどくちをしきことはなし。一豊仕への初めなり。かかる名馬に乗りて見參に入れたらんには、主君の御感にもあづかるべきものを。」  
とひとりごといひしに、妻つくづくと聞きて、

「その馬の價は、いかばかりにや。」

と問ふ。

「黄金十兩とこそいひつれ。」

「さほどに思ひたまはば、その馬求めたまへ。價をばみづからまゐらすべし。」

とて、鏡の箱の底より黄金十兩を取り出す。

一豊、大きにおどろきて、

「この年ごろ身貧しく、苦しきのみ多かりしに、その黄金ありとも知らせたまはず。されば、今この馬ゆめにも求め得べしとは思はざりき。」

と喜び、またうらむ。妻

「のたまふところ、ことわりにもこそ。されどこれはわらはこの家にまありし時、この鏡の下に父の入れたまひて、ゆめゆめ、世のつねのことに用ふべからず。汝の夫の一大事あらん時にまゐらせよとて、たまひき。されば、家貧しくして苦しむなどは、世のつねのことなり。まことにや、都にて御馬ぞろへあるべしなど聞ゆ。君は仕への初めなり。良き馬にめして、主君の御感にあづかりたまへ。」といふ。

一豊すなはちその馬を求めたり。  
やがて馬ぞろへの日とはなれり。いづれおとらぬ馬多

く集りたる中に、一きは目だちてたくましきを信長うち見て。

「あつぱれ、名馬。たれの馬ぞ。」

と問へば、家臣答へて、

「これは東國第一の名馬とて、商人の引きてまありしを、一豊が求め得たるものに候。」

と申す。信長、

「一豊は仕へて日なほ浅く、家も貧しからんに、よくもかかる名馬を求めたるぞ。見あげたる志。」  
としばし感じてやまざりけり。

十一 かんこ鳥

朝日、いまあらはれて、  
ああ、はるけくもこの峯に  
光さし来ぬ。

薄きみどり、こきみどり、  
山々のひだ縞しまなして、  
見る目うるはし。

川の流れか、さらさらと  
はるかなる麓ふもとのわたり  
かすかに響き、

いづくともなく霧きりわきて、  
風のまにまに谷間より  
ただよひのぼる。

かつこう、かつこう、かんこ鳥  
こだまのごと、ゆめのごと、

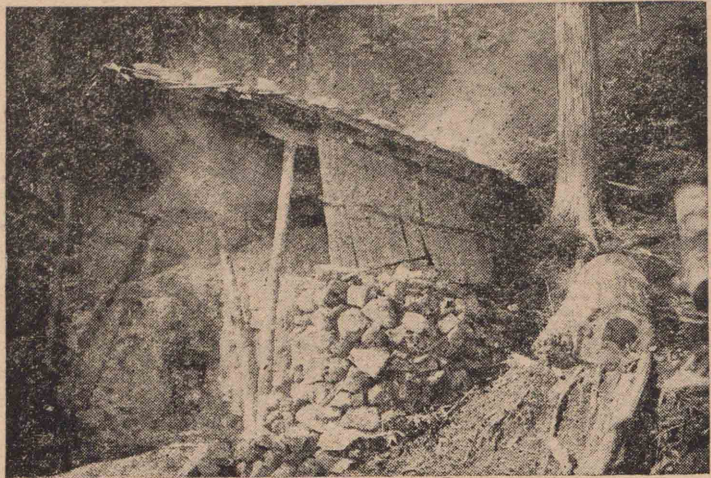
かつこう、かつこう。

十二 炭焼小屋

一

青々と茂つたみどりの梢に、煙がなびいてゐる。炭焼が  
まから立ちのぼる煙である。

源作ぢいさんは、その煙のやうすをじつと見つめた。黄  
色な煙の中に、白い煙がまじつてゐる。どうもをかしい。  
煙の色もへんだが、煙の出るやうすに活氣がない。かまが  
病氣をしてゐるな——と、ぢいさんは思つた。



源作ぢいさんは、かまのそばにすわつて、たき口から中を  
のぞいて火のかげんを見た。真赤に  
焼けた木から、めらめらとほのぼが立  
ちのぼつてゐる。壁にくり抜かれた  
いくつかの小さな穴から、ほのぼが隣  
りのかまの中へ吸ひ込まれて行く。  
そのかまには、炭に焼く丸太がぎつし  
りとつめ込まれてゐるのだ。ぢいさ  
んがのぞいた、あのかまから火氣を送  
つて、このかまの中の丸太をむし焼きにする仕掛なのだ。

源作ぢいさんは、もえさがるほのほの色をじつと見た。それからおもむろに立ちあがつて、さしわたし二メートルもある、土で固めた圓形のかまの上へそつと手を置いた。かつとした火氣が手のひらを打つ。源作ぢいさんは、かまがいらいらしてゐるなど感じた。どつかりと、またかまの前にすわつてもくもくと立ちのぼる煙を見つめながら、黄色な煙が、薄むらさき色に變つて行くのを心に念じた。

二

二三日たつてから、かまの口を開いた源作ぢいさんは、眞黒に焼けた炭を外へ取り出した。

「うまく焼けたかな」と氣がせく。三十何年炭を焼いてゐても、かまから取り出すまでは、どんなに焼けたかが氣がかりである。うまく焼けた時は、とびあがるやうにうれしい。この調子で次も焼かうと思ふ。失敗した時は、ひどく氣持が悪い。この次には、何かしてうまく焼きたいものだと思ふ。源作ぢいさんは、一メートルばかりの長さに焼けた炭の端を指の先でこすつてみた。堅くて、うまく焼けてゐない。火のまはりが悪かつたのだ。

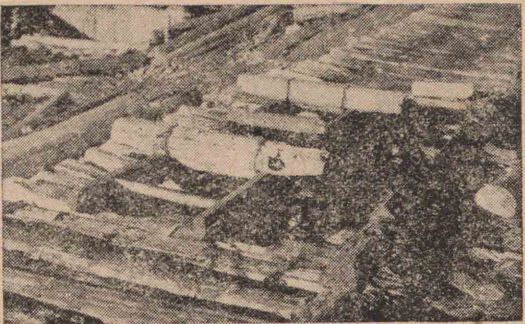
炭を取り出しながら、源作ぢいさんはかまの天井や壁をこつこつとたたいてみた。どこも悪くはない。をかしい

など思つて、煙突へ通じる口をふと見たとたん、おやと思つた。木のやにがうんどこびりついて、煙の出口をふさいでゐる。これだ、これが病氣のもとだと、源作ぢいさんの心は急に明かるくなつた。

三

炭焼がまの裏の山道には、丸太を並べた木馬道が、曲りくねつて山の奥の方へ續いてゐる。

そりの形をした木馬に、木を山のやうに積んで、源作ぢいさんが引いておりて来る。右へ曲り、左へ折れて、かまの近くでぴたりと止つた。



汗をふきふき、ぢいさんは小屋へはいつて、のこぎりを持ち出した。腰には、毛皮で作つた小さなざぶとんのやうな腰皮をさげてゐる。腰皮の上  
に腰をおろし、切つて来たばかりの木を、一メートルばかりの長さにそろへて、楽しさうにひき始めた。

一本一本の丸太を、あの炭焼がまへ入れて、今度こそは、上できの炭に焼いてみようかと考へながら、ぢいさんは一心に木をひいてゐる。



十三 ぼくの子馬

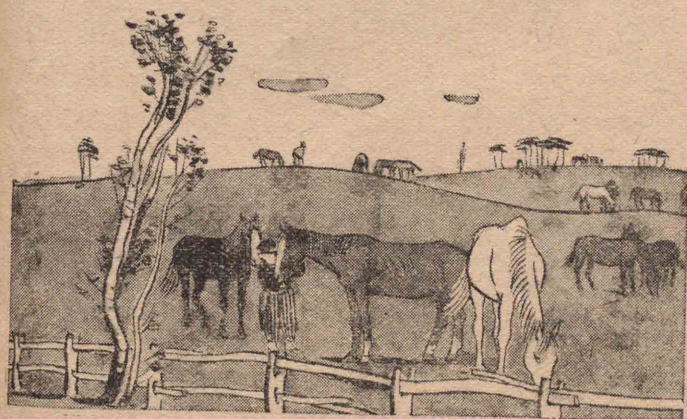
北斗は、ぼくの子馬です。

生まれたのは、去年の春、ちやうど櫻の花の咲くころでした。ぼくが学校から歸ると、父はにこにこしながら、

「新一、子馬が生まれたよ。」

といひます。それを聞くと、ぼくは、むちゆうになつて馬屋へかけ込みました。

見れば、うす暗くしてある馬屋の奥の方



で、母馬が、生まれたばかりの子馬をしきりになめてやつてあました。父もあとから来たので、ぼくが、

「おとうさん、子馬はをすですか、めすですか。」

とたづねますと、父はさも得意さうに、

「をすさ。」

といひます。

「ちやあ、今度の子馬は、ぼくに世話をさせてください。」

父は、しばらくだまつてあましたが、

「うん、おぢいさんによく指圖していただいて、ひとつ一生けんめいにやつて見るかな。」

と許してくれました。

ぼくはうれしくてたまりません。さつそく、そのことを祖父にいひますと、祖父も、

「ほう、おまへが世話をするといふのか。よからう。ひとつやつてごらん。こまかいことはだんだん話してあげようが、第一は馬をよくかはいがつてやることだ。日本の馬は、氣が荒いとかいはれるさうだが、それも馬が悪いのではない、扱ふ人がいけないから、馬に悪いくせがついてしまふのだ。しんせつにしてやれば、馬ほどすなほでりこうなものはないぞ。」

と教へてくれました。

子馬の名は、北斗ときまりました。一週間ばかりたつて、親子とも馬屋の外へ出しますと、北斗は、おくびやうさうな目つきをして、始めて見る世界をさもめづらしさうに眺めました。大きな犬ぐらゐの大ききで、足は、ばかにひよる長く見えます。さうして、ともすると母馬にすり寄つては、乳を吸つてばかりゐます。そのかはいいやうすは、今でも忘れません。

日がたつにつれて、だんだんぼくになれて來ました。時には乳を飲むのも忘れて、ひよる長い足で元氣よく、草原の

上をはねまはることもありました。

六月になると、母馬につけて、近くの牧場へ放牧にやることになりました。ぼくは、せつかくなれて来た北斗を、手もとからはなすのがいやでしたが、さうしないと、子馬が丈夫にならないのです。で、ぼくは、そのころ学校から歸ると、すぐ牧場へ行つて見ました。牧場には、村のあちこちから、同じやうな子馬がたくさん来てゐて、母馬の草をたべるあとを追ひながら、廣い野原を楽しさうに遊びまはつてゐました。

放牧に出してから、北斗のからだはめきめき丈夫になりました。

ました。足もしつかりして来ました。さうして、長い夏も過ぎ秋が来て、野山の草木が枯れるころ、五箇月ぶりてうち  
の馬屋へつれて歸りました。

いよいよ北斗は、乳を離れるやうになりました。からだの手入れをしたり、運動をさせたり、ぼくの仕事がおひおひいそがしくなつたのは、そのころからです。しかしそれだけに、かはいさもいつそう深くなつて来ました。

寒い冬の日でも、一日に一度はかならず、北斗をつれて運動に出かけました。ぼくがかげ出せば、北斗もかけ出し、ぼくが止れば、北斗も止り、追つたり追はれたりしながら、楽し

く運動しました。

二歳ごまになつて、北斗もめつきり馬らしくなりました。今年も、六月から放牧に出しましたが、去年と違つて、ぼくが行くと、北斗はうれしさうにすぐぼくのところへとんで来て、鼻をすりつけます。手のひらに塩をのせてやると、うまさうになめます。ぼくが唱歌を歌ふと、北斗はいつまでもおとなしく草をたべながら、ぼくのそばで遊んでゐます。

いつのころからか、北斗は、清くんのうちの子馬の青と、大そう仲よしになりました。ぼくのおない時は、いつでも青と遊んでゐるやうでした。

九月に二歳ごまの市が始るといふので、八月に北斗をうちへつれて歸りました。

北斗は、ほんたうにりこうですなほです。教へることは何でもよく覚えるし、櫛しで手入れをしたり、足をあげさせてひづめの裏をさうぢしたりしても、じつとおとなしくしてゐます。物に驚いてかけ出さうとするやうな時でも、「ほう」と聲を掛けて、手のひらで軽く首やせなかをなでてやると、すぐ安心して静まつてしまひます。この間も祖父がいひました。

「おまへがよくめんだうを見てやつたから、北斗はりつぱ

な二歳ごまになつた。この村に二歳ごまもたくさんあるが、北斗ほどもごとなのは見かけないやうだ。幅もあるし、骨組も丈夫になつた。

ぼくは祖父のこのことばを聞いて、ほんたうにうれしいと思ひました。

二歳ごまの市が始れば、いよいよ北斗と別れなければなりません。一年半も手しほにかけた北斗といつしよにあるのも、あといく日もないと思ふと、ぼくは泣きたいほどつらい氣がします。けれども、北斗はきつと軍馬に買ひあげられるに違ひありません。さうして、りつばな乗馬になり、軍人さんに乗せて堂々と歩いてせう。その勇ましいやうすを思ひ浮かべると、ぼくは北斗のために喜んでやりたいです。

#### 十四 星の話

晴れた夜空を仰ぐと、たくさん星が、まるで寶石をちりばめたやうに美しくかがやいてあります。ちよつと見たところでは、ほとんど無数と見えるこれらの星にも、名前や番號があり、位置もきまつてあるのですが、ただぼんやり見てゐるだけでは、いつたいどれがどうなのか、さつぱり見當が



つきません。

そこでまづ真北へ向かつて立つて見ませう。北の空にもたくさん星がありますが、その中で一つだけいな星があります。地平線からしだいに見あげて、頭の真上まで行く途中、真中邊より少し低いところに、かなり大きな星が一つ見えるのが、それです。もつともその高さは、見る場所によつていくぶん違ひます。北の北海道でしたら、ほぼ真中邊ですが、反対に南の沖繩おきなほや臺灣たいわんで

したら、ずつと低くなります。

しかし、かういつただけでは、まだなかなか見當がつかないでせう。さうしたら、どこかその邊の空に、ひしやくのやうな形に連なつた美しい七つの星をさがすことにしませう。これはすぐ見つかります。七月の中ごろですと、夜九時ごろ、北より少し西へ寄つた方に、ますを下に、少し曲つた柄を上へに、ちやうどひしやくを立てたやうなかつかうになつてあます。この七つの星を北斗七星といひます。

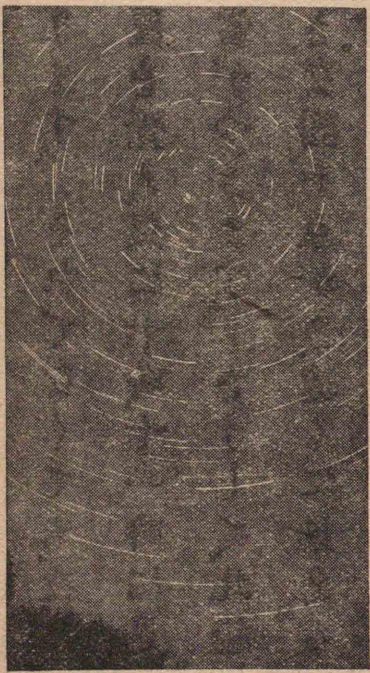
北斗七星が見つかつたら、その七つの中の、下の端に當る二つの星に注意しませう。さうして、かりにこの二つの星

を結ぶ線を引き、それをなほ右の方へ延してみませう。すると、この二つの星の距離の五倍ばかりのところ、きつと一つの星が見つかります。さつきさがさうとしたのがこれ、北極星といふ星です。

北極星は、いつ見てもほぼ真北にある星ですから、夜道に迷つた時など、この星を見つければ、すぐ方角を知ることができます。昔から、航海の目當てとなつてくれたのは、この星です。

ところで、大空の他の星は、時刻によつてかなりあり場所が變つて行きます。今どれか一つの星を、東へさし出た軒

端にすれすれに當てて、下からじつと見てみますと、やがてその星は、軒端にかくれて見えなくなります。つまり星は、西へ西へと移つて行くのです。日や月が東から出て西へはいるやうに、星もだいたひ東から出て西へはいるのです。星の動き方も、つとくはしく調べて見ますと、北の空では、星が、北極星をほぼ中心に、圓を廻がいて動いてゐるのだといふことがわかります。寫真機を北極星に向けて、一時間ぐらゐふたをあけておくと、この圓を廻がくやうす



がわかるやうに寫真にうつります。それでなくても、夜九時に北斗七星を見てその位置を覚え、更に十時、十一時に見ると、この動き方が大てい見當がつかます。さうして、北極星の近くに見える星ほど小さな圓をゑがき、遠くに見える星ほど大きな圓をゑがきます。

しかし、このやうに星が動くといふのも、實はわれわれの住んである地球がまはるから、さう見えるだけのことですが、今の場合、それを考へに入れないておきませう。

さて、この北極星や北斗七星を目當てにして、その附近を見ると、いろいろの星の列があります。まづ、北斗七星とそ

の附近にあるいくつかの星を加へて、大熊座おほくまといひますが、それは昔の人が、それらの星の列に大きな熊の形を考へたからです。また、北極星を柄の端にして、北斗七星とどうやら似た小さなひしやく形に連なるのを、大熊座に對して小熊座といひ、小熊座と北斗七星との間に尾を入れて、小熊座を包むやうにのろのろと曲りくねつて連なる十ばかりの星を龍座りゅうといひますが、どちらも星があまり大きくありませんから、よく氣をつけて見ないと、はつきりしません。それよりも、北極星の右下の方に、椅子いすの形に連なる五つばかりの星はカシオペア座で、俗に「いかり星」とも山形星ともい



ひますが、これははつきりしてゐますから、だれでもすぐ見つけます。さうして、この邊北から南へかけて、天あまの川が、夏の夜空に銀の砂子を美しくまき散らしてゐるのが見られます。

## 十五 遠泳

「これから遠泳をする。一人残らず目的地に着くやうに。」先生の激励のことばをしつかり心にだいて、先頭から順々に海へはいつて行つた。

熱い海岸の砂をふんでゐた足の裏に、つめたい海の水が氣持よく感じられる。水の中を歩きながら、顔を洗ひ頭を水でひたす。両手でからだに水を掛けると、ひやつとして氣持がよい。ひざから腰、腰から腹へと、海は一足ごとに深くなつて行く。思ひきつて、からだをずぶりと水の中へつけると、つめたさが身にしみわたる。

先頭から一人一人、順に泳ぎ始めた。いよいよ、ぼくの番になつた。立ち止つて、手を前へ延し、足で地面をけると、からだはすいと水の上へ浮かんだ。

風は吹いてゐないが、波が、目の前の水面に、小さな三角の小山をこしらへ、それが顔に當つて、目や鼻へゑんりよなく

はいつて来る。うつかりすると、呼吸の調子で、がぶりと塩からい海水を飲まされる。

初めはみんな元氣であつた。薄青く見えてゐた海の水が、いつのまにかこいみどり色に變る。後をふり返ると、海岸はだいぶ遠くなつて、人も家も、小さく見える。目の前を白いかもめが海面とすれすれに飛んで行く。

ゆつくりと、自然に兩腕で水を大きくかき、兩足で水をけつて進む。二列に並んだ列を、まだだれも亂す者はない。天氣のよい日、おだやかな海原を航海するやうな楽しさである。この調子なら、わけもなく遠泳ができさうだと、ぼく

は喜んだ。一本松を目當てに進んで行く。いつもそばを離れない警備船の上から、先生が、

「時々頭を水にひたせ。」と注意される。

遠くに見えた一本松が、だんだん近づいて来る。初めは何も氣がつかなくつたが、一本松がはつきり見えるやうになつたころから、今までからだを浮かしてゐてくれた海が、いくらかを出して泳いでも、なかなか前へ出してくれない。ぼく一人かと思つて前の方を見ると、みんなも同じだ。

「潮の流れが逆になつたから、みんな元氣を出せ。」

先生の聲である。「島の端をまはつてしまへば、あとはらくだ。潮流の激しい一本松の沖あひを、泳ぎ抜けるかどうか成否の分れめだ。」と話された先生のことばが、思ひ出された。潮流に負けてはならないと、ぼくは一かき一けりに力をこめて、潮の流れと戦ふ氣持で泳いだ。

きちんとそろつて進んでみた列が、だんだん亂れて行つた。おくれる者、列からはみ出る者。ぼくは、先頭におくれないやうに、一生けんめいで水をけつた。潮の流れはますます急になるのか、いくら手足に力を入れても、進みはにぶい。一人落ち、三人落ちして、とうとう先頭から三四人めに

なつた。さうなると、先頭からかけ離れて、間をつめようとしてもなかなか思ふやうにはいかない。並んで泳いでゐた小島くんも、だんだん弱つて來たやうだ。

「小島廣田、しつかり泳げ。」

先生の聲援がありがたかつた。ぼくは、むちゆうで腕と足を動かした。

ふと氣がつくと、小島くんの姿が見えない。何だか一人取り残されたやうな、さびしい氣持になる。その氣持を拂ひのけるやうに、手足に力を入れようとしたが、力がはいらない。水の中でもがいてゐるやうである。顔を水にひた

して、からだを浮かすやうにして泳いだ。一本松を見たが、まだかなり遠いところで手招きをしてゐるやうだ。手足が、石のやうにこはばつて来る。先頭からは、どんどんおくりて行く。もう、だめだ。警備船へあがらうか。

「廣田、おくれたつてかまはない。ゆつくり泳げ。」

と、船の上から先生が叫ばれた。ぼくは、自分の弱い心持が恥づかしくなつた。おくれたつて、ほかの人がやめたつて、ぼくだけは、最後までどうしても泳がり——それからは、何も考へないで、まるで機械のやうに手足を動かした。

一本松が、右手の海岸のかけの上に、大きく立つてゐるのが見えた。もう一息だと力を出した時、ふしぎにからだは、すいすいと前の方へ軽く進んで行つた。かけの下をぐるつとまはると、今まで見えなかつた島の裏側の海岸が見えて来た。青々とした木が、鏡のやうに静かな海面に影を投げかけてゐる。その向かふに、眞一文字に白い線を引いたやうな砂濱が、目にしみるやうに寫つた。

「廣田よくやつた。もう大丈夫だ。潮の流れもいいし。そら、あそこに見えるだらう、あの砂濱が、到着點だ。」

ぼくは、全身の力を腕と足とにこめて、遠い砂濱をめがけて、元氣よく泳いで行つた。

十六 海底を行く

目の前に、

關門海峡はさざ波をたたへ、  
車窓から何百の船が見える。

「おかあさん、

あの海峡をくぐるのね。」

汽車はたちまちトンネルにはいった、  
ざあつとすべつて行く車輪の響き。

「おかあさん、

今、海の底を走つてゐるのね。」

本州と九州の握手あぐしゆだ、

日本最初の海底トンネルだ。

「おかあさん、

まるでおとぎ話のやうね。」

だいたいな物資や郵便物や、  
私たちを一氣に運んでくれる。

「ありがたいぢやありませんか。  
命がけてほつたおかげですよ。」

ふり返ると、

關門海峡はさざ波をたたへ、

いそがしさうに船が動いてゐる。

「おかあさん、

あの下を通つて来たのね。」

十七 秋のおとづれ

秋は虫の聲から始る。

晝間は、まだ暑い暑いの歎聲が口をついて出て来る。眞夏の暑さはだれも覺悟をしてゐるが、八月もなかばを越せばどこかに秋らしいものが見えてもよささうなものである。それなのに、寒暖計は三十度を越えたがる。暑さはもうたくさんだといひたくなる。するとある日の午後、裏山の森で、「つくつくぼうし、つくつくぼうし」の聲を聞いた。

暑い日がやつと暮れても、よひの間は家の中がむつとして、柱も壁も、さはるとどうやら熱氣を吐いてゐる。二階へあがつてみても、さして涼しい風はなささうである。ただ

晴れた夜空に星がきらきらとさえ、銀河があざやかに中天にかかつてある。その時ふと耳にするものは、前の草原で鳴く虫の聲である。それがはたして何虫であるかはつきりはしないが、かなりたくさんの聲であることを感じる。夜がふけると、思ひなしか屋根瓦が少ししめつて来る。

夜の燈火をしたつて来る虫は、蛾や、こがね虫など、どれもこれもただうるさいだけであるのに、どこからかすかに羽音がして障子に軽くばさど止つた虫が、やがてすいつちよすいつちよをくり返す。このくらあいきやうのある氣のきいた虫は、めつたにないものだ。さうして、それがし

きりに「秋だ、秋だ」と鳴きたてるやうに思はれる。

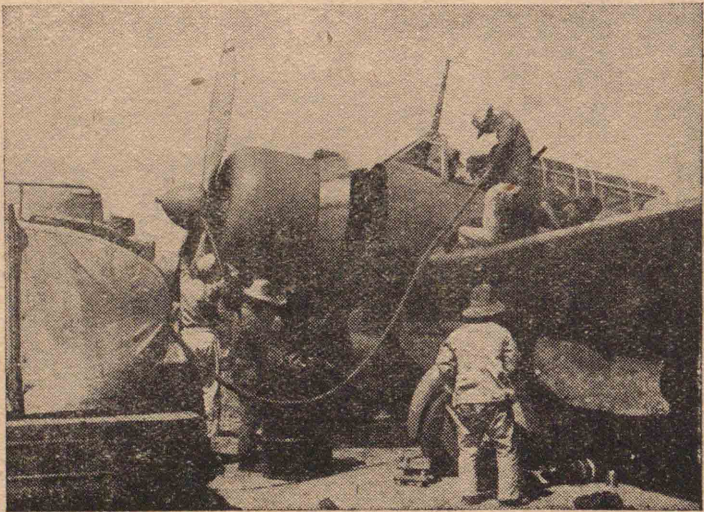
もう何といつても秋である。よし晝間はどんなに暑からうとも、日光はかすかに黄色味を帯びて、壁やへいの強い反射がいくぶんやはらいで見える。梢吹く風が、思ひ出したやうにざわざわと音をたてる。背戸のみぞ端に、秋海棠がかはいらしい薄赤の花をつける。畠のにらの花に、頭でつかちないちもじせせりが飛びちがふ。何よりも、たんばに早稲の穂が出そろつて、白く波打つのが、秋らしく見渡される。

やがて二百十日が来て、農家はただ風ばかりを心配する。

夜は、そろそろこぼろぎが家の中へはいつて、床の下や壁の中で聲高く鳴きたてる。

十八 飛行機の整備

勇  
「今日の子ども常會は、お約束通り、飛行機の整備をしてあられるをぢさんに来ていただきました。をぢさんを圍んで、いろいろお話をお聞きしようと思ひます。當番にあつた私が司會者になりませう。日ごろ私たちは、わが航空部隊のめざましい働きを聞いて、たいへん感激してゐるのですが、それにつけても、飛行機の整備といふことについてよく知りたいと思つてゐたのです。をぢさんは、もう五年間もこの方の仕事を、していらつしやいます。どうぞ、いろいろなお話をしてください。またみなさんも、聞きたいことがあれば、何でもおたづねください。初めに、整備といふことについて、をぢさんにお話をお願いいたします。」





をぢ「飛行機の整備といつても、いろいろな仕事があります  
が、一口にいふと、飛行機がいつでも飛び出せるやうに、  
準備をしておくことなのです。また、いつ飛び出して  
も、十分働けるやうに手入れをしておくことなのです。」  
正男「出発前には、どんな準備をしますか。」

をぢ「車輪に空気を入れたり、燃料や爆弾を積み込んだり、機  
械にくるひがないか、ていねいに調べたりします。が、  
いちばん注意して調べるのは、発動機です。試運転を  
して、その爆音を聞いてみて、順調であるか、その震動の  
具合がどうかと、しつかり調べてから、みんなに乗つて  
もらひます。」

太郎「飛行機がもどつて来た時には、どんな手入れをします  
か。」

をぢ「やはり、発動機の手入れを真先にします。発動機のお  
ほひをはづして、機械に手を當ててやうすを調べます。  
それから、あちこちに油をさしてやつたり、燃料を補充  
してやつたり、よごれたところをきれいにしてやつた  
りします。」

花子「私たちがからだ具合でも悪いと、母が額に手を當てて、  
熱のかげんをみたりなんかするのと似てゐますね。」

をぢ「さうさう、それですよ。飛行機にとつて、整備兵は母親のやうなものです。飛行機の熱を計つたり、息づかひを聞いたり、痛いところをさすつてやつたりするのです。

飛行機のもどつて来る時刻がおそいと、気が氣ではありません。それはちやうど、遠足に行つた子どもの歸りを案じる母親の心と變りません。」

勇「敵弾でも受けて歸つた時は、どんな氣がしますか。」

をぢ「痛ましいと思ひます。しかし、よくこれまで戦つてくれた、手がらを立ててくれたと、手を合はせて拜みたい

氣持にさへなります。」

正男「どんな時がいちばんうれしうでせう。」

をぢ「何といつても、時間通りに飛行機の整備ができて、爆音勇ましく五十機七十機と、頭上を堂々と出發して行く時です。」

太郎「さうでせうね。私たちが、小さなグライダーを作つて飛ばしただけでも、うれしうのですから。」

をぢ「飛行機はただの機械だとは思はれません。何か生きもののやうに思はれます。自分のからだの一部分のやうにさへ、感じられるのです。たとへ、自分は地上に

居残つても、自分の魂は、飛行機といつしよに空をかけめぐつてゐます。あらしにあつてはあないだらうか、うまく弾幕をくぐり抜けたかしらと、絶えず飛行機の身の上を案じてゐます。

こんな心配をしてゐる時に、無事歸つて来るのですから、うれしくてなりません。愛機のプロペラにだきついて喜ぶ人さへあります。』

春枝「ほんたうにかはいいのですね。」

をぢ「かはいくてなりません。飛行機にお酒を供へたり、しつかり頼むぞと願つたり、ああ、よくやつてくれたなど

いひながら、翼をなでてやつたりしますよ。」

正男「整備兵といふのは、みんな地上で働く人ばかりですか。」

をぢ「さうではありません。機上勤務をする人もあります。」

正男「機上では、どんな仕事をするのですか。」

をぢ「いつも發動機の調子に氣をつけてゐたり、燃料や、電力を調節したりします。とにかく、飛行中に起つた故障は、みんなこの人たちの手によつてなほさなければなりません。」

機上整備兵の座席の前には、たくさんの計器が並んでゐます。これらの計器が一目で見分けられるやうに

ならないと、一人前ではないのです。」

春枝

「さつきは、うれしい時のお話をうかがひましたが、こん

どは、苦しい時のことをお話してくださいませんか。」

をぢ

「ただ一心にやつてみますので、苦しいとは別に思ひません。が、困ることはよくあります。ことに寒い時に、それが多いのです。例へば小さなねぢをしめるにしても、指の先でしめるのですから、厚い大きな手袋をはめておいては、しめられません。どうしても、手袋を脱ぎます。すると、寒さのために指がこぼりついてしまつて、わるくするとくさりします。それで、片手づつ手袋を脱

いで、仕事をします。それに、寒いと發動機もうまく動かないので、温めてやるのに苦心をします。」

花子

「寒い時もたいへんでせうが、暑い時も苦しいでせうね。」

をぢ

「なにしろ、機體の中は、ふだんでもかなり温度が高い上に、南洋の日光に照りつけられると、いつそう暑くなります。からだをやつとは、いるやうなせまいところでは、修理をしてみると、まるで汗と油でぐつしよりになつてしまひますよ。」

勇

「飛行機がたくさん並んで歸つて来る時、あれは自分の飛行機だといふことがわかりますか。」

をぢ「機種と同じものはなかなかわかりませんが、違ふものなら、近づけばすぐわかります。爆音でもわかります。」

正男「でも爆音は、どれも同じやうではありませんか。」

をぢ「いや、赤ちやんの泣き聲はみんな同じやうだが、おかあさんには、うちの赤ちやんの泣き聲がすぐわかるやうなものです。」

男「何か目じるしをつけたら、いいぢやありませんか。」

をぢ「さうです。自分の飛行機を早く知りたいために、尾翼にちよつと色をぬつておくとか、何とかすることがあります。」

しるしで思ひ出しましたが、撃ち落した敵機の数だけ、どこかにしるしをつけることもあります。」

太郎「をぢさんの飛行機には、どんなしるしがつけてありますか。」

をぢ「驚<sup>わ</sup>の顔をかくことにしてあます。」

春枝「いくつかいてありますか。」

をぢ「四十八。」

花子「まあ、四十八も。するともう四十八機も撃ち落したのですね。」

正男「すごいなあ。」

勇 「もつといろいろお聞きしたいのですが、をぢさんのお  
歸りになる時間になりました。これでおしまひにし  
ようと思ひますが、終りに一つだけお聞きいたします。  
今、お話をうかがつて、飛行機の整備の大切なことはよ  
くわかりましたが、をぢさんはやはり飛行機に乗つて  
敵地を爆撃したり、空中戦をやつたりした方がいいと  
は思はれませんか。私ならさう思ひますが。」

をぢ 「さう思ふでせう。けれどもよく考へてごらんなさい。  
飛行機の整備なくしては、空中戦も敵地爆撃もありま  
せんよ。そこで航空部隊の働きと整備とは、一つに考

へなければなりません。整備は戦闘なりといふこと  
を、私たちはかたく信じてゐます。」

勇 「よくわかりました。ためになるお話をたくさんお聞  
かせくださいまして、ありがとうございました。」

### 十九 動員

動員の第一夜なり明けやすき

秋晴れや旗艦にあがる信號旗

敵前に上陸すなり秋の雨

突撃を待つ草むらに虫すたく  
 敵遠し月の廣野のはてしなく  
 幾山河愛馬と越えて月の秋  
 地圖を見る外套ぐわいたうをもて灯ひをかばひ

二十 三日月の影

重代のかぶと

甚次郎じんじらうは、兄に呼ばれて座敷へ行つた。見れば、母もそこ  
 にゐた。床の間には、すばらしく大きな鹿しかの角と三日月の

前立てとのついたかぶとが、かぎつてある。兄は改つた口  
 調でいつた。

「甚次郎、このかぶとは祖先傳  
 來の寶、これをおまへにゆづ  
 る。十歳の時、軍に出て敵の  
 首を取つたほど強いおまへ



のことだ。どうかりつばな武士になり、家の名をあげて

くれ。」

甚次郎は、胸がこみあげるやうにうれしかった。  
 「ありがたくちやうだいいたします。」



といつて頭をさげた。母はそばからいつた。

「それにつけても、御主君、あまご尼子家の御恩を忘れまいぞ。尼子家の御威光は、昔にひきかへておとろへるばかり、それをよいことにして、敵の毛利がだんだん攻め寄せて来る。成人したら、一日も早く毛利を討つて、御威光を昔に返しておくれ。」

甚次郎の目は、いつのまにか涙で光つてゐた。

甚次郎は、この日から山中鹿介しかのすけゆきもり幸盛と名のり、心にかたく主家を興すことを誓つた。さうして、山の端にかかる三日月を仰いで、

「願はくは、われに七難八苦を與へたまへ。」と祈つた。

一騎討

數年は過ぎた。尼子の本城である出雲いづもの富田城とんだは、そのころ毛利軍に圍まれてゐた。

鹿介は、戦つてしばしば手がらを立てた。かれの勇名は、みかたのみか、もう敵方にも知れ渡つてゐた。

敵方に、品川大膳だいぜんといふ荒武者がゐた。かれは、鹿介をよい相手とつけねらつた。名を榎木狼介勝盛たらぎおほかみのすけかつもりと改め、折もあらば鹿介を討ち取らうと思つた。



ある日のこと、鹿介は部下をつれて、城外を見まはつてゐた。川をへだてた對岸から、鹿介の姿をちらと見た狼介は、われ鐘のやうな聲で叫んだ。

「やあ、それなる赤糸をどしの甲は、尼子方の大將と見た。」

鹿の角に三日月の前立ては、まさしく山中鹿介であらう。鹿介は、りんとした聲で大音に答へた。

「いかにも山中鹿介幸盛である。」

狼介は喜んでをどりあがつた。

「かくいふは石見いほみの國の住人、榎木狼介勝盛。さあ、一騎討の勝負をいたさう。あの川しもの洲こそよき場所。」

といひながら、弓をこわきにはさんで、さんぶと水にとび込んだ。鹿介もただ一人、流れを切つて進んだ。

狼介は、弓に矢をつがへて鹿介をねらつた。尼子方の秋上伊織あきのい介がそれを見て、

「一騎討に、飛び道具とはひけふ千萬。」

と、これも手早く矢をつがへてひようと射る。ねらひ違はず、狼介が満月のごとく引きしばつてゐる弓のつるを、ふつりと射切つた。みかたは「わあ」とはやしたてた。

狼介は、怒つて弓をからりと捨て、洲にあがるが早い、四尺の大太刀を抜いて切つてかかつた。しかし、鹿介の太刀

風は更にするどかつた。いつのまにか狼介は切りたてられて、しだいに水際に追いつめられて行つた。

「めんだうだ。組まう。」

かう叫んで、狼介は太刀を投げ捨てた。大男のかれは、鹿介を力で仕とめようと思つたのである。

二人はむずと組んだ。しばらくはたがひに呼吸をはかつてゐたが、やがて狼介は満身の力をこめて、鹿介を投げつけようとした。鹿介はそれをじつとふみこたへたが、片足が洲の端にすべり込んで、思はずよろよるとする。たちまち狼介の大きなからだは、鹿介の上へのしかかつた。鹿介

は組み敷かれた。兩岸の敵もみかたも、思はず手に汗をにぎる。

とたんに、鹿介はむつくと立ちあがつた。その手には、血に染まつた短刀が光つてゐる。狼介の大きなからだは、もう鹿介の足もとにぐつたりとしてゐた。

「敵も見よ、みかたも聞け。現れ出た狼を、鹿介が討ち取つた。」

鹿介の大音聲は、兩岸に響き渡つた。

そののち、幾たびか激しい戦があつた。さしもの敵も、この一城をもてあましたが、前後七年にわたる長い戦に、尼子

方は多く討死し、それに糧食りやうじよくがとうとう盡きてしまった。城主尼子義久は、涙をのんで敵に降つた。富田城には、毛利の旗がひるがへつた。

苦節

尼子の舊臣は、涙のうちに四散した。鹿介は、身をやつして京都へのぼつた。

戦國の世とはいへ、京都では花が咲き、人は蝶てふのやうに浮かれてゐた。

そのうちに、尼子の舊臣がおひおひ京都に集つて來た。かれらは、鹿介を中心として、主家の再興を企てた。

そのころ、京都のある寺に、ひんのよい小僧さんがゐた。さうして、それが尼子家の子孫であることがわかつた。鹿介は、この小僧さんを主君と仰いだ。

「尼子家再興のことは、わが年來の望みである。」  
小僧さんは、ををしくもかういつて、衣を脱ぎ捨て、尼子勝久と名のつた。

時は來た。永祿十二年六月のある夜、勝久を奉じる尼子勢は出雲に入り、一城を築いて三度ときの聲を作つた。

この聲が四方に呼び掛けてもしたやうに、今まで敵についてゐた舊臣が、續々と勝久のところへ集つた。諸城は、片

端から尼子の手に返つた。しかし、富田城は名城であるだけに、なかなか落ちさうにもなかつた。

その間に、毛利の大軍がやつて来た。輝元を大將とし、吉川元春、小早川隆景を副將として、一萬五千の精兵が堂々と進軍して来た。

富田城がまだ取れないのに、敵の大軍が押し寄せたのでは、みかたの勝利がおぼつかない。しかし、鹿介は腹をきめた。すべての軍兵を率ゐて、富田城の南三里、布部山に敵を迎へ討つた。みかたの軍は約七千であつた。

まことに死物ぐるひの戦であつた。敵の前軍はしばし

ぱくづれた。しかし、何といつても二倍以上の敵である。新手はあとからあとから現れる。さしもの尼子勢もへとへとにつかれ、多くの勇士はむざんや枕を並べて討死した。勝ちほこつた敵の大軍は、やがて出雲一國にあふれた。勝久は危くのがれて、再び京都へ走つた。

上月城

それからまた幾年か過ぎた。鹿介は、織田信長に毛利攻めの志があることを知つて、かれをたよつた。鹿介を一目見た信長は、この勇士の苦節に同情した。

「毛利攻めのお先手に加り、もし戦功がありましたら、主人

勝久に、出雲一國をいただきたくございます。」

鹿介の血を吐くことばに、信長は大きくうなづいて見せた。つひに再び時が来た。尼子方は秀吉の軍勢に加つて、毛利攻めの先がけとなつた。

いち早く播磨の上月城を占領して、ここにたてこもつた二千五百の尼子勢は、ほどなく、元春・隆景の率ある七萬の大軍にひしひしと取り圍まれた。

秀吉の援軍が今日来るかあす来るか、それを頼みに勝久は城を守つた。毛利方の大砲を夜に乗じてうばひ取つて、みかたは一時氣勢をあげた。

しかし、援軍は敵にはばまれて近づくことができなかつた。七萬の大軍に圍まれては、上月城は一たまりもない。

弓折れ矢盡きて、勝久はいさぎよく切腹することになつた。「いたづらに朽ち果てたかも知れないわたしが、出雲に旗あげして、一時でもその領主となつたのは、まつたくおまへの力であつた。」

勝久は、かういつて鹿介に感謝した。

鹿介は、男泣きに泣いて主君におわびをした。しかし、かれはまだ死ねなかつた。尼子重代の敵毛利をせめてその片われの元春をおのれそのままにして置けようか。七難

八苦はもとより望むところである。鹿介は主君に志を告げ、許しをこうてわざと捕らはれの身となつた。

甲部川の秋

鹿介は西へ送られた。

ここは備中の國甲部川の渡しである。天正六年七月十七日、秋とはいへ、まだ烈しい日光が、じりじりと照りつけてある。

川端の石に腰掛けて、來し方行く末を思ひながら、鹿介はじつと水のおもてを眺めた。燕が、川水にすれすれに飛んでは、白い腹を見せてちう返りをしてゐた。

突然、後から切りつけた者がある。鹿介はそれが敵方の一人、河村新左衛門であると知るや、身をかはして、ぎんぶと川へとび込んだ。新左衛門もとび込んだ。二人はしばし水中で戦つたが、重手を負ひながらも、鹿介は大力の新左衛門を組み伏せてしまつた。すると、これも力自慢の福間彦右衛門が、後から鹿介のもとどりをつかんで引き倒した。

七難八苦の生涯は、三十四歳で終りを告げた

甲部川の水は、このうらみも知らぬ顔に、今もいういうと流れてある——月ごとに、あのあはい三日月の影を浮かべながら。

企	補	否	牧	他	塩	譯	然	護	嚴
(130)	(111)	(98)	(82)	(61)	(50)	(34)	(24)	(11)	(5)
諸	充	援	驚	惡	壯	舊	句	永	幸
(131)	(111)	(99)	(85)	(61)	(52)	(34)	(24)	(12)	(5)
利	額	濱	寶	祖	掌	江	準	盛	伏
(132)	(111)	(101)	(87)	(62)	(52)	(36)	(25)	(14)	(8)
率	魂	到	連	障	舷	岡	衛	退	得
(132)	(114)	(101)	(89)	(63)	(52)	(37)	(25)	(16)	(8)
朽	勤	峽	柄	臣	戒	更	亞	及	典
(135)	(115)	(102)	(89)	(66)	(52)	(41)	(25)	(17)	(10)
謝	脫	州	極	價	鐘	裏	協	梢	歷
(135)	(116)	(103)	(90)	(66)	(53)	(46)	(25)	(17)	(10)
捕	片	資	迷	貧	副	頂	英	鬪	史
(136)	(116)	(103)	(90)	(66)	(53)	(46)	(26)	(19)	(10)
烈	修	郵	球	妻	規	乳	雜	帶	採
(136)	(117)	(103)	(92)	(66)	(54)	(46)	(28)	(20)	(10)
幾	便	俗	志	律	薄	憲	密	例	
(122)	(103)	(93)	(69)	(54)	(47)	(30)	(20)	(1)	
誓	歎	勵	隣	訓	隻	巡	激	際	
(124)	(105)	(94)	(73)	(57)	(47)	(30)	(21)	(11)	
盡	河	亂	敗	量	潛	查	浴	良	
(130)	(106)	(96)	(75)	(58)	(48)	(30)	(23)	(11)	
再	司	逆	斗	師	鮮	繼	舌	保	
(130)	(108)	(97)	(78)	(58)	(50)	(30)	(23)	(11)	

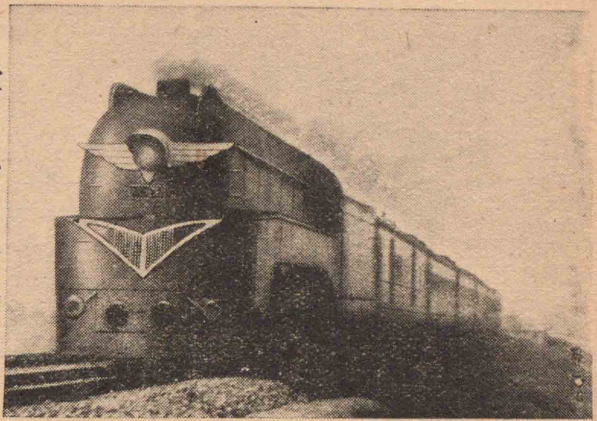
### 附 録

#### 一 「あじあ」に乗りて

九時大連發の「あじあ」に、ぼくは乗つた。見送りに來た母が大勢の人にもまじつて見える。

「おかあさん、行つてまゐります。」

ぼくが手をあげると、母もあげた。窓を開くことができないので、ぼくのこのことばも通じないらしい。母も何かいつてゐるやうだが、こちらにはわからない。「あじあ」は流れるやうに動きだした。ぼくは、この春休みにハルピンのをぢのところへ行くのである。



一度乗つてみたいと思つてゐたこの汽車に乗れて、ほんたうにうれしい。やがて金州にさしかかると、車掌さんが説明する。

「右手は大和尚山で、關東州第一の高山、その手前の岡に、乃木勝典中尉の記念碑があるのです。左には、金州城が手に取るやうに見えます。」

雪の少い南滿洲の畠はよく耕されて、農家がぼつぼつ見える。沿線の楊の木に、かささがが巢をいくつも掛けてゐる。ぼくがそれを見てゐると、

「何を見てゐるの。」

と、後から聲を掛けた者がある。ロシヤ人の女の子だ。

「あのかささぎの巢を見てゐるのさ。」

しかし、「かささぎ」といふ日本語がわからないらしい。「鳥の巢」といつたら、すぐわかつた。この子は新京へ母と歸るところで、マルタといふ名ださうだ。

「おかあさんは、あそこ。」

と指さしたところに、みどり色の上着を着たロシヤ婦人が本を讀んでゐる。

熊岳城に近づくと、望小山が見えだした。あの山の傳説を話してあげようといへば、マルタはお晝御飯をたべながら、母といつしよに聞きたいといふ。三人は食堂車へはいつた。ロシヤ少女が、給仕をして働いてゐた。



「昔、母と子と二人暮しの家があつた。むすこは、勉強のため山東へ渡つて行つた。何年かたつてもう歸つて来るころになつたので、年寄つた母は、毎日毎日望小山へのぼつて待ち續けた。むすこは、一生けんめいに苦學したかひがあつて、りつばな身分になり、いよいよ故郷へ歸ることになつた。ところが、途中海が荒れて、むすこは船とともに沈んでしまつた。母は、そんなこととはつゆ知らず、風の日も雪の日も待つてゐるが、とうとう山の上でなくなつたといふ。」

大石橋で始めて停車した。ホームへ出ると、風がつめたい。車掌さんが、ボーイに、「もう少し、車内の温度をあげてくれたまへ。」といひつけてゐた。

北の方では、二三日前に雪が降つたので、遠い山の峯が白くなつ



てゐる。何だか空がくもつて來た。鞍山の製鋼所から茶色の煙が立ちのぼり、ほのほが勇ましく見える。まもなく、遼陽の白塔が眺められた。落ち着いた、美しい形である。太子河を渡る。「あじあ」は防音装置がしてあるので、鐵橋を渡る響きが車内にやかましくは聞えない。

「スタンプを押しませんか。」

ボーイがさういつて來たので、ぼくは、てちやうに「あじあ」のスタンプを二つ押ししてもらつた。

奉天に着いた。ここから安東、吉林、北京へ、鐵道が分れるので、列車がいくつも止つてをり、滿人の赤帽がいそがしさうに荷物を運

んでゐる。驛前には、馬車や自動車が行つたり來たりしてゐる。ここで、兵隊さんがどやどやと乗つた。奉天はまことに平な大都市で、ただ北陵ほくりやうの松林が小高く見えるだけである。

雲が切れて、日光がさして來た。雲はしきりに流れて、早春の畠を野を、そのかげがはつて行く。「あじあ」は、雲のかげを追ひ越したり追ひ越されたりして、滿洲の大平野をまつしぐらに突進す。

四平しへいに着く。ここからチチハルへ線が分れる。冬になると、この大きな停車場に大豆の山が積まれるさうだ。

やがて、一人の兵隊さんがぼくに、

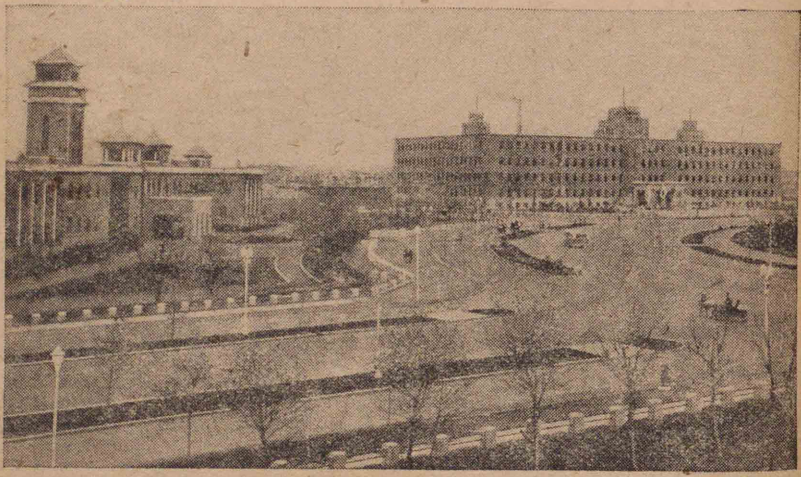
「あそこの岡を知つてゐるかね。あれは公主嶺こうしゆりやうで、昔、ロシヤのコサック兵は、あそこで教練したのだが、今は農事試験場ねんじしけんじやうのひつじや牛が、かけつこをしてゐる。」

と、元氣よく話しながら、日にやけた顔で笑つた。向かふの農家に、滿洲國旗がひらめいてゐる。そばで、滿人たちが耕作かうさくの手を休めて、こちらを眺めてゐる。

「汽車のかけが長くなつた。」

と、マルタがいふ。汽車のかけだけではない。電柱のかけも木のかげも、ずつと延びた。「あじあ」は、一氣に國都新京へせまつて行く。遠く國務院や、關東軍司令部の建物が夕日にはえ、新しい住宅があざやかに見える。

兵隊さんたちは新京で下車した。ぼくがおじぎをすると、みん



な元氣よく舉手あしほをする。マルタも、おかあさんといつしよにおりて行つた。急に車内がさびしくなる。

「さやうなら。」「さやうなら。」

マルタは、とびあがりながら手を振つた。

大きな赤い夕日が沈むところだ。夕日とぼくとの間には、さへぎるもの一つない。あすまた、お日様、ごきげんよう。鳥の群が地上から飛びあがつた。薄むらさきの夕空には、ぼら色の雲がたなびいた。それを見てゐたら、母を思ひ出した。夕食して、母に手紙を書かうと思つて、食堂車へ行つた。

食卓しょくだくには、電燈が明かるくついてゐる。ロシヤ少女の給仕が、ぼくの顔を見覚えてゐて、にこにこしながら食事を運んでくれる。どこか知らない驛に停車した。大きな木の上に星が光つてゐる。



「あじあ」のしるしのはいつた用紙に手紙を書いて、晝間押ししてもらつたスタンプを入れて、ボーイに頼んだ。席に歸ると急に眠くなつて來た。

ふと氣がつくと、「あじあ」はいつのまにか町へはいつてゐた。さうして、時間表通り二十一時三十分、ハルピン驛にぴたりと停車した。ぼくが急いでおりると、突然、

「やあ、よく來たね。一人でよく來たね。」

と、をぢの聲。ぼくの手は、がつしりとにぎられてゐた。眞冬のやうに寒い夜だ。空には、半月がさえかへつてゐた。

## 二 大地を開く

一

ぼくは早くから目がさめた。この北滿の土地に来て、始めての朝だ。

窓がほのぼのと明かるくなつた。あこがれてゐた大陸に、第一日を迎へるのだ。

起床ラッパが鳴り響いた。

ぼくたちは、元氣よく起きた。日本では感じられないやうな、痛い寒さが押し寄せて来る。

まだなれない部屋なので、急いで上着を着たり、ズボンをはいたりしてゐると、思はず頭を柱にぶつつける。

水で口をすすぎ、顔を洗ふと、心がからつとして、全身がひきしまつた。

宿舎の前に、一同が整列する。風にまじつて、粉雪が降つてゐる。旗竿に高く國旗をかかげた。するするとあがつて行く日の丸の旗が、風に大きくゆれてゐる。かうした光景は、今までに何度も見たが、今朝ほど尊く思つたことはなかつた。

それから體操をする。「えい、やあ」と、力いつばい掛聲を掛けると、心が引きしまる。體操がすんで、所長の訓示があつた。

「ここへ始めて來た諸君を、自然はこの吹雪をもつて迎へてくれた。諸君をりつばな開拓者にしようとして、よい試練を與へてくれた。諸君は、これからいろいろな困難にあふだらう。しかし、負けてはならない。諸君は、新しい東亞のために、ここで大地

を開くのだ。この光榮くわうざいを忘れるな。」

粉雪が、ぼくの前の友だちの肩に、さらさらと降りかかる。ぼくは、心の中で「やるぞ、やるぞ。」と何度も誓つた。

次の日は、雪が晴れた。風もやんだ。まぶしいほど晴れた天気になつた。

目のとどくかぎりの廣野だ。宿舍のほかには、目をさへぎる何物もない。天と地と一つになつた大きな風景だ。ここが大陸日本の第一線なのだ。

ぼくは、友だちと「しつかりやらう。」といひながら、手をにぎつた。

二

それから五六日たつて、のろ狩をやつた。のろといふのは、北滿に住んでゐる鹿しかの一種である。皮は着物にしたり、肉は食用にし

たりする。ぼくは、まだ見たこともないが、どうかしてつかまへてやらうと意氣いきこんで行つた。

散兵の隊形をとつて、遠巻きにのろを追ひ出して行く。どんどん野原を進んで行くと、向かふのくぼ地から、二匹ののろが現れた。みんなが、「わあつ。」と思はず聲をたてる。のろはびつくりして、急いで逃げ出した。なかなか足が早い。とうとう、林の中へもぐり込んでしまつた。

「今度こそ、つかまへてやるぞ。」

また進んで行くと、やぶのところから、二匹の親のろと一匹の子のろが出て來た。それつと、みんなが走り出した。三匹ののろは、とぶやうにして岡を越え、谷を渡り、走つて行く。ぼくたちは、だれも追ひつけなかつた。

「ざんねん。」

「のろのやつ、のろくないぢやないか。」

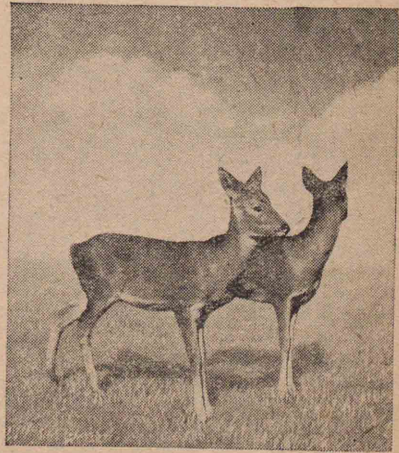
「こつちがのろまなんだよ。」

こんなことをいつて、笑つた。

三

日一日と暖くなつて来た。

枯草におほはれてゐた野原に、青い草の芽がもえて来た。よく見ると、むらさきの花が咲いてゐる。百合のつぼみのやうな形をした、かはいらしい花だ。花びらにも葉にも、うぶ毛が生えてゐる。青いものはまつたくなかつた野原に、咲きだしたこのむらさきの花は、ほんたうにきれいに見える。ぼくは、この花を根からほつて、宿舎の庭へ持つて来て植ゑた。あとで「おきな草」といふ草花であ



ることがわかつた。

夜が明けて、最初に出かける班は、トラクター班だ。發動機の音をとどろかしながら、開拓に進軍する。

續いて農耕班（はた）が出發の用意をしてゐる。ほかの班のものは、まだ床についてゐる。ぼくが、農耕班の友だちに、

「きみたちの班は、朝が早くてたいへんだな。」

といふと、

「いや初めはつらかつたが、もうなれてしまつた。これでも楽しいことがあるんだよ。」

と答へる。

「楽しいことつて何だ。」

「種をまくと、かはいいい芽を出す。芽がだんだんのびる。それを

毎朝見に行くのが、ほんたうに楽しみなんだ。」  
はうれん草の畠が、青々としてゐる。ゑんどうが大きくなつて、  
つゝを延してゐる。

このころになると、野原には、黄色な花が咲き始める。赤い花も  
少しまじつて咲く。

朝霧の中で、放牧の馬が、露をふくんだ草をおいしさうにたべて  
ゐる。

朝日の光をうけて、霧に薄い虹がぼつとかかることもある。

四

ぼくたちの一行が大勢やつて来たので、宿舎がせまくなつた。  
別に宿舎の建てましをしなければならぬ。自分たちの家は、自  
分たちの手で建てようといふので、大工の仕事に取りかかつた。

作業場は、かなり離れた小高い岡の上である。

なれない手つきで、のを振るひ、のこぎりをひき、かんなを掛け  
た。柱ができる、板ができる。新しい木の香が、ぼくたちを喜ばし  
た。

三時過ぎになると、ひと休みする。その時、うどん粉をふかした  
大きなまんぢゅうをたべる。甘味は少いが、働いたぼくたちには、  
實にうまい。

長い春の日も暮れかけて、手もとが暗くなる。

「作業やめ。」

みんな道具をきちんとまとめて集合する。  
美しい夕やけだ。みんなの顔が、赤くなつてゐる。

### 三 草原のオボ

蒙古の大草原を旅する者は、あちこちにあるオボを目當てに歩いて行く。

オボといふのは、地の神をまつるために、蒙古人が供へた一種の土まんどゆうで、小高い岡に作られたり、泉のそばにまうけられたりする。その上に、楊の枝をたばねて突きさしたのがあり、石ころを積み重ねたのがあり、柱を立てて、それに字を書いた旗を結びつけたのがある。

文字通り大自然のふところに生まれ、そこで死んで行く蒙古人たちにとつては、天と地が生命の父であり、母である。おのづからこれにたよる心がわき、いつとはなしに信仰となつて、このやうな

オボを作り、大地をまつるやうになつた。



見渡すかぎり廣々として、何一つ目には  
いらぬ草原では、たとへ小さなオボでも、  
旅をする者には實に大きななぐさめであ  
り、また心強い目じるしである。草原を海  
にたとへれば、オボはまさにその燈臺であ  
る。旅に出かけて行く人が、オボの前を通  
る時には、「どうぞ、無事に旅をすることがで  
きますやうに。」と祈り、またその歸りには、「お  
かげで、歸ることができました。」と感謝の祈  
りをささげる。そのお禮のしるしとして、石ころ一つ積み重ねた  
り、楊の枝を立てたりするので、オボは、いつとはなしに少しづつ大



きくなつて行く。

夏の初め、草原があざやかなみどりにおほはれるころ、オボの祭  
がもよほされる。

この時は、遠いところからたくさんの人が集つて来て、たいへん  
なにぎはひである。きのふまで木一本もなかつたやうな草原に、  
たちまち町ができる。

儀式は、夜明け前の暗いうちから行はれる。まづ僧の祈りに祭  
典が始り、火をたいたり、太鼓をたたいたり、ラッパを吹いたりする。  
参拜するものは、子ひつじの料理をあげたり、手製のチーズやバタ  
などを供へたりする。

オボのそばには、馬や、牛や、ひつじなどがつながれる。これらの  
家畜は、神にささげるものとして、その年の春に生まれたものの中

からえらばれたものである。僧は、この家畜の一頭一頭に祈りを  
ささげ、喜びの歌を歌ふ。

そのうちに東の地平線が白み、まもなく夜が明けて朝日ののぼ  
るころには、もう儀式は終つてゐる。

式後、神に供へられてゐた馬や、牛や、ひつじなどは、それぞれ家畜  
の群にはなされる。一度かうしてオボの祭にえらばれた家畜は、  
決して賣つたり、殺したり、乗用にしたりすることができないこと  
になつてゐる。

餘興として、勇ましい競馬があり、いかにも大陸的な蒙古すまふ  
が行はれたりして、祭の気分は高まつて行く。

楽しいにぎやかな祭がすむと、みんなどこか遠いところへ散ら  
ばつてしまふ。それはちやうど、潮がさつと引いて行くやうであ

る。さうして、またもとのひつそりとした大草原にたちもどり、オボだけが大地にぽつんと残されるのである。

昭和十七年十二月十九日 印刷  
昭和十七年十二月廿一日 發行  
昭和十七年十二月廿三日 翻刻發行  
昭和十八年一月廿三日 翻刻發行

初等科國語五

定價金貳拾七錢か

本卷挿入ノ寫眞・地圖ハ昭和十七年十二月陸軍省ト海軍省ト協議済

著作權所有

著作發行者兼

文 部 省

東京都王子區堀船町一丁目八百五十七番地

翻刻發行兼印刷者

東京書籍株式會社

代表者 井 上 源 之 丞

印刷所 東京都王子區堀船町一丁目八百五十七番地  
東京書籍株式會社工場

昭和十七年十二月二十二日  
文部省檢査済



發行所

東京書籍株式會社

初五  
赤坂昌子